

〔論文審査結果〕

論文提出者：オンドロナ

審査対象論文：多民族混住地域における民族意識の再創造 - モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究 -

論文審査委員：宇野重昭教授、中見立夫教授、真柄欽次教授、井上治助教授、貴志俊彦助教授

【内 容】

本論文は、1995年から2004年までの中国内モンゴル自治区赤峰市におけるモンゴル族と漢族の族際婚姻関係の複雑な実態と、その文化的・政策的・意識的背景、家族内文化と親族関係の変化、中国における民族構成の多様化とそれにもなう民族意識の変化を明らかにした上で、族際婚姻家庭の次世代が複合的かつ可変的で曖昧化している新たな民族意識を再創造していることをその形成プロセスとともに論じたものである。

本論文は、序章、第1章から第7章、終章の九つの章からなる。

序章と第1章では、研究目的の提示、関連先行研究の批判的分析、基本理論の検討、調査地域の設定がなされる。これまでの関連先行研究のほとんどは、地域と対象を自治区内の特定一地域に住むモンゴル族に限定したものであり、それら研究の多く依拠するM・ゴードンの同化理論はエスニック・アイデンティティの同化や喪失にとどまるものであった。これに鑑みオンドロナ氏は、自治区赤峰市内の都市部、地方小都市、農耕地域、牧畜地域に調査地点を設定し、対象をモンゴル族と漢族に拡大した。さらに、W・ソラーズの「エスニシティの再創造」論に依拠することで、単なる同化・喪失に決着しない柔軟な考察が可能となるとした。

第2章では、族際婚姻の数値（実数と割合）は都市・地方小都市・農耕地域・牧畜地域の順に高くなっていること、都市・地方小都市・農耕地域ではモンゴル族の族際婚姻率が漢族のそれよりも高く、牧畜地域ではその逆になっていること、各年代別の数値が都市部では大きく変化し、地方小都市では緩やかに変化するのに対し、農耕地域と牧畜地域では微増の傾向が見られること、都市・地方小都市・牧畜地域では漢族男性とモンゴル族女性との婚姻が多いのに対し、農耕地域ではモンゴル族男性と漢族女性との婚姻が多いことを明らかにした。

第3章から第5章では、上の事実が現出される諸背景の考察にあてられる。第3章では文化的背景を取り上げる。民族混住が進行する赤峰地域では、モンゴル族と漢族の言語・飲食・慣習などの文化が相互に影響して差異を縮め、族際婚姻の増加を促進している。さらに族際婚姻は、両文化を柔軟に吸収する素地を形成し、双方の固定的文化や慣習からの脱却意識を人々の中に醸成している。つまり、族際婚姻は民族文化の融合の結果であり、融合を促す契機でもあると論じた。

第4章では政策的背景を取り上げる。交通と通信の発達・産業の発展・人口移動にもなう都市化の進行は都市部と地方小都市における族際婚姻の数値の変化に作用してその地域差を形成する要因となっている。また、人口抑制・少数民族優遇・民族所属変更許可・行政区分変更・婚姻登録方法変更などの国家・地方レベルでの施策はモンゴル族の人口を増加させ、結果として族際婚姻の数値が増加したことを述べた。

第5章では意識的背景が取り上げられる。氏は、婚姻の条件として重視される諸事項間の相関を分析した結果、婚姻条件として民族所属が重視されなくなるほど族際婚姻に対して肯定的な見方が強くなるという相関関係を発見し、人々が民族所属を重視する意識の度合いと族際婚姻に対

する賛否の意識の度合いが族際婚姻の数値の変化に影響を及ぼしていることを明らかにした。また、この意識は、文化の相互浸透、国家・地域政策に左右される人口割合、都市化などの社会変容などが総合的に人々に影響を与えて醸成されたものであると論じた。

第6章と第7章では、族際婚姻の結果と影響を具体的事例に即して分析する。第6章では、家族文化と親族関係の変化に着目する。調査地の族際婚姻者は族内婚姻者に比べ、家庭内祭祀や室内装飾にその所属民族の伝統や特徴を強く反映させず、折衷的あるいは流行の形式を好む傾向が存在する。また、族際婚姻者は族内婚姻者に比べて直系親族関係を中心としない社会的ネットワークを形成していることを示して、族際婚姻家族においては、民族という範疇を越え社会的により開かれた価値観と人的ネットワークが構築され、それが次世代に継承されると述べた。

第7章では、民族の構成要素の多様化と民族意識の変化に着目する。現在の中国の民族が民族所属変更者を包含していることから、その構成要素は多様化しており、従来のモンゴル族＝モンゴル人、漢族＝漢人という定義はその内実を反映していないことを指摘する。氏はこれが中国特有の民族の可変性に由来することを考慮し、「民族」という呼称によって民族所属を変更したモンゴル族と漢族を新モンゴル民族、新漢民族と呼ぶことで、その構成要素の多様化を明解に説明した。また、複雑な民族出自を内包する族際婚姻家族の次世代の民族意識が複合的で曖昧化していることに着目、これを固定的な民族概念では把握不能な第三の新たな民族意識であると述べた。

終章では、ここまでの論述をまとめ、第一に、族際婚姻の実態には地域差と民族差があり、時々の政策や社会状況を背景に複雑に推移したことを明らかにした点、第二に、民族構成の多様化を指摘した点、第三に、族際婚姻者の民族意識が一概に弱いとはいえないとの見解を示した点、第四に、族際婚姻者の次世代には混血・生育環境・政策・社会情勢を背景とする複合的で曖昧な民族意識が創造されているとの見解を示した点、これら四点において先行諸研究を凌駕したことを示す。続いて、ソラーズの理論の有効性を認めた上で、現代モンゴル族は、両親の民族所属を肯定し、文化の相互浸透、社会的・人為的・政策的要因による民族集団の混合、社会経験の中で新しい民族意識を形成したと述べて、ソラーズが解明したアメリカ移民の次世代の新しいエスニック・アイデンティティとの違いを明らかにした。最後に、現代モンゴル族が再創造する民族意識の内実を、モンゴル人と漢人の民族意識を構成する諸要素が複合し、複合化した諸要素の間で曖昧化し、その間で揺れ動く「モンゴル民族」意識と、国家や社会によって創られた「新モンゴル民族」意識の二つがあると述べる。この新たな「民族」意識は、「民族」の可変性が生み出した、血統的モンゴル・漢民族、法的モンゴル・漢民族、文化的モンゴル・漢民族、イメージ的モンゴル・漢民族という諸要素が、一個人のなかに複数存在することで形成されていると論じた。

本研究は、中国を中心とする研究者による先行研究を広く網羅しており、それらの所論に対する慎重な分析を経て問題点を明確に示した上で議論が展開されている。また、本研究において設定された、多民族社会内モンゴルでは独特のプロセスとパターンで民族意識が再創造されるという仮説は、ソラーズの「エスニシティの再創造」論に依拠しつつも、現代内モンゴル社会の多民族性と多文化性、国家・地方レベルの施策のあり方などを十分に考慮した上で立てられた学術的なものである。このような先行研究批判、理論設定、仮説の構築を踏まえ、その仮説の検証のために必要となる要素を備えた調査地点を当地の民族人口割合と生業形態に基づいて設定し、調査地域における十年間にわたる族際・族内婚姻の実態を提示し、その実態を表出せしめた文化的・政策的・意識的背景を明らかにし、族際婚姻の結果と影響を如実に示す事例研究を踏まえた上で、

独創的な結論に至っている。この一連の流れは整理が十分に行き届き、その論旨はきわめて明快である。氏がおこなった調査は、社会的にオーソドックスなフィールドワークと資料収集・分析に徹したものであるが、従来の先行研究に比べてより広い範囲でおこなわれた点や、従来の研究では扱われなかった婚姻登録書を使用した点に大きな特色がある。そしてその結論は、着実なフィールドワークとそれを通じて得られたアンケートや統計資料が示す数値に対して取り入れた統計学的分析手法、さまざまな経歴や民族的背景をもつ多数のインフォーマントの探求から得られた貴重な証言に基づく事例研究に支えられ、地域と民族を限定しておこなわれた先行研究が導き出さなかった民族意識のダイナミズムを明らかにした点で、これまでの現代モンゴルに関する研究に類例を見ないものとなっている。しかも、中国の少数民族政策と族際婚姻が現代内モンゴル社会に引き起こした現象を冷徹に考察し、従来明らかにされなかった民族構成と「民族」の意味内容の多様化を大胆に指摘し、民族意識に対して「ゆらぎ」「曖昧」などの状態を見出した点は、今後のモンゴル研究のみならず、多民族社会・国家の研究に一定の刺激を与えるであろう。

審査員からは、本論文が抱える不安材料と短所として以下のことが指摘された。まず、理論設定に当たってゴードンとソラーズの二者のみしか扱わなかったことに問題はないか、研究方法を当初からオーソドックスなフィールドワークと資料収集に限定せずに一層のブラッシュアップを図るべきではなかったか、少標本理論に基づく調査で十分な量のサンプルが得られたか、人類学と社会学の境界線上に位置する問題を扱うにあたり氏が採った調査研究方法是広く専門家が承認する方法であるといえるかなど、理論と方法に関する疑問が示された。また、第2章から第7章にかけての各結論において四つの調査対象地域が示すそれぞれの特徴が十分に反映されていない部分があるという考察の不徹底さも指摘された。さらに、内モンゴルの実情を踏まえた「民族」・「族」・「人」という術語の概念規定が結論の部分においてなされることが論文の冒頭部で明確に記されていないことが指摘された。しかしながら、本論文は上に記したような数多くの長所を有しているため、これらの不安材料と短所が本論文の価値を損ねることはない。

オンドロナ氏が提出した論文は、政治・経済体制、民族、文化等において多様性とダイナミズムに富む北東アジア地域をより深くより総合的に研究しうる人材と、その研究成果を活用して北東アジアにおける地域間の協力と共生を進展させ、地球社会の新しいモデルを提示しうる人材の養成を目的とする本研究科第一号の博士学位授与の審査対象である。本論文は、北東アジア地域の多民族多文化性を代表する内モンゴル地域のダイナミックな民族関係や政治状況、それにとともなう地域社会の変容が生み出した族際婚姻に着目し、そこに生活する人々がもつ民族意識や民族観の多様性とダイナミズムを明らかにした点において、また、新たな民族意識の持ち主たちが中国の内モンゴルという多民族共生社会が生み出した存在であると論じた点で、本研究科が目指す教学目的を十二分に体現したものである。本研究科が目指す北東アジア学とは従来の地域研究の枠を越えた地域研究であるが、その発展が不十分な現時点では、氏が示したような多様なアプローチの蓄積を経て、その体系を明確にしてゆくことが重要である。この意味において、オンドロナ氏が本学の北東アジア学の構築に果たした貢献は大きい。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は、論文審査の結果として、本論文を社会学博士の学位を授与するに値するものと判定する。